その訳を見ますと、単に〃一切〃または、〃倶一切〃と訳されています。この語について、ビユルヌーフは、sarvāvantam は、S.K.T の sarvāvant (adj) が Pāli と混じたもの[3]と云って居ります。

また現に訳されたものも、殆んどは、一切と訳されています。つぶさに言語のありかたを観てみますと、srva は元来が吠陀語であったものがS.K.T 化され形容詞として用いられるようになったものであって、合成されたる avantam は、avanti+am と復数語尾をもった名詞であると見る可きであろう。

之のように解釈をすれば文法を無視したものとして非難される方もあるでしょうが、仏教梵語にはその非難が当らない。そればかりか経典成立が古ければ古い程、一層文法をもって律すれば読むことも出来ないでしょう。

例えば寿量品の gātha を調べて見ますと、

Prāklitt ——27
Vedic ——47
Hybrid.S.K.T.——41
Buddhist.S.K.T.——51
Pāli ——76
Sanskrid ——115
V.P.S.id ——41

以上のようになります。この事実を見ても分る通り悉くの言語が文法の鉄則を厳守して成立しているとは思えない。このことについて水野博士も文法書の中で「パーリ語の連声法則は梵語の如く厳密でなく、不規則の場合が多い」[4]と言われている。

avanti と云う語は、国名である。この国はヴインデイアの西 ujjaini との間にある国である。この avanti 国こそ或る意味で大乗に関係ありと考えられる。ウエスターガード。クーン。フランケ等の研究例を上げて宇井伯寿先生が結論されて、西ヴインデイヤ山脈を中心として行われた言語が仏教経典最初の言語とされている。[5]寿量品の gātha もこれ等言語の影響を受けたと見る事が出来る。法華経中一、二ケ所にある、sarvāv ntam を〃全てのアヴンテイ〃と訳して見ると、今まで抽象的であった経典が一段と具体化されて、読者に迫って来るように感じられるのは何故であろうか。

①唐慧詳「法華伝記」巻一。 ②Sbhāratā＝頗羅堕。
③Int Hst B Ind P13。 ④水野弘元著、パーリ文法 56P
⑤ 宇井伯寿著原始仏教資料論 36P

注法華経御撰集の意義について

山中喜八

注法華経御撰集の御意図、其目的について二種の推量を試みんとす。

㈠　第一に吾が恩師片岡随喜居士は、注経十巻は、本経の金文を能摂・能判とし所注の経論釈を所摂・所判として、三国仏教の最要の文を集めて法華経王の大海に注帰せしめ、或は本経に比況して自らに諸経の位次を定め、或は本経に照鑑して自らに諸釈の謬解を匡し給へるものと解せり。即ち法華秀句に言ふ「是故天台一家会二一切経一帰二法華経一。是則敷二揚法華一会二通諸経一」を如実に具現せられたるなり。故に恩師は、注経十巻の御注記中には聖祖御自身の妙解は毫末も存ぜざるべ存きことを確信し居られたり。右の師説を証する一例として、

A　注経第六巻寿量品の裏面二ヶ所に華厳経新旧両訳の阿僧祇品及び仏小相光明功徳品を御注記あり。右の御所引は仏が心王菩薩竝に宝手菩薩に対して将に説法を開始し給はんとするを叙したるが、其説法の内容については引き給ふ所なし。惟ふに、華厳経の旧訳三十四品・新訳三十九品の内、仏の自説は唯此二品のみなり。然るに法華経は、序品・信解品を除けば余の二十六品必ず仏の自説あり。恐らくは此仏自説の多少を比況し給へるならんか。而して金綱集の華厳宗見聞に出せる「華厳経一部巻品次第」には「仏説二品」として右の両品を挙げ、更に阿僧祇品については「此品只紙一枚」と記載しあり。

B　又、華厳経の「心如工画師画種々五陰〇心仏及衆生是三無差別」を引くには「如来林菩薩説・覚林菩薩説」「或見大菩薩充満三千界〇或見盧舎那於彼転法輪」を引くには「普賢菩薩説」。「一切諸仏身唯是一法身一心一智恵力無畏亦然」を引くには「賢首菩薩答文殊問云」と、それぞれ説主の菩薩名を念記し給へる事実。

に稽ふれば、仏自説の義辺、やがては随自意説の義辺に於て華厳を法華に比況し給へることを窺ふべし。

さりながら地面に於ては、先づ本経の文を挙げ次に其義を解明せる諸釈を引き給へる諸例あり。更に注経御注記の経釈二一〇七章の内、玄義及び文句の本末にて八一二章を占め居る事実。更に又「仏三十二相」・「十号」・「大小三災」・「四意趣」等と標目して是等を註解する諸文を注記せられたるあり。此事実は本経を註疏するために引用せられたるものの存することを否定する能はず。

然しながら「注法華経の注は、註疏の註にあらず、注帰の注なり」とする恩師の説は、在来の注経観には曾て見る能はざりし独自の見解にして、此点、田中智学居士が「即ち本経を規矩として諸論群釈その取るべきを取りその捨つべきを捨て、検攷して其醇を介録し、以て条然一大系下に統判して、天下後世の異義異見を杜絶したまへるもの、実に是れ註法華経なり」と道破せると一脈相通ずるものあり。

㈡　次に、小子の考ふる所にては、他日の公場対決を期し、之に備へて諸宗破立の肝要を伝へんがために撰集せられたるには非ざるか。即ち

A　聖祖の加へ給へる設問若くは標目の辞句に、「疑云。明二別

教一念三千乎」・「疑云。光宅等諸師明十界互具乎」・「慈恩改悔ノ文」・「花厳経如法花明二乗作仏之文」・「爾前秘密明久遠実乎」・「慈恩恐還属累経末随天台之釈」・「真言一行皈天台文」・「嘉祥皈伏智者書」等とあること。

B　曾谷抄に「若黙止過一期之後。弟子等定謬乱出来之基也。爰以愚身老耄已前欲糺調之」と仰せありし聖教聚集と其糺調整束に関する深甚なる御決意。

C　御遷化記録に所謂「六人香花当番時可披見之」。自余聖教非沙汰之限云云」の御遺誡。

D　注法華経の御注記を根幹として、之に枝葉を加へて次第に集大成せるものと見らるる金綱集の結構。（此項第十回大会に於て発表）

等に之を窺ふことを得べし。但し注経には、浄土及び禅門の教籍は殆ど引用せられて居らず、此点諸宗破立の肝要とは称し難きに似たれども、文句・記・止観・弘決・補注等の出だせる念・禅対破の要文を御注記あり。更に又、注経御撰集の時は、専ら真言対破に意を用ひ給へる故か。

右の如く案じ来れば、河合日辰師が「註法華経の事たるや、吾祖一代の設化の蘊奥を網羅して残すことなく、一切経の肝要、能破所破、至れり尽くせり」と述べたる、蓋し、適評と言ふべし。

仏教興立史上
仏讖以後の末法と其重要性

木村日紀

仏陀予言の末法に「闘諍堅固白法隠没」の「法滅的末法」と「於閻浮提白法流布」の「法興立の末法」との二種がある。前者は礼の五百年を指し、後者は残る九千五百年を指す。前者の滅亡史的末法期は世界史上濁悪な社会制度や人間思想の悪傾向となって表われ、それに対して各時代の偉人の反撥が発生し、それが幾多の過程段階を経て凡てが革新され、現代の如き科学文化の興立史的末法と転じてゐる。小生の仏滅年代は「衆聖点記」の西暦前四八五年に一致するから、入末期は西暦一〇一四年となる。この時代から現代に至る世界史には前述の二種の末法期が現われてゐる。其処で法華経流布の立場からすると、その主体性は末法にある。して経それ自体は四仏知見が示す如く人類唯一の解脱教であり、仏覚証を其のままを経典化したものである。久遠本仏を通して顕われた「常住不変の諸法実相」は「一切世間」の本然の姿を現わした縁起の理法で極めて合理性の法である。其が天台大師によって法界円融の一念三千の教理と発展し更に其の合理性が明了となった。故に法華経は合理性を中心する現代の科学文化と矛盾しないのみではなく、其を指導し、其に処を与へる真理である。故に法